秋の妖精

こぐまじゅんこ

９月になった。
朝晩は、すーっと冷えた風が吹き抜けるようになった。
それでも、日中は、まだまだ暑くて、
「夏と変わらないじゃない。」
と、秋子はつぶやく。
体育の授業でプールがなくなったのが残念でしかたがない。
こんなに暑いのに、リレーの練習なんて嫌だなぁ・・・。
秋子は泳ぐのは得意だったけど、走るのは苦手なのだ。
でも、今日の体育は６時間目だから、終わったらもう帰れる。
そう思うと、ちょっとはがんばれそうな気がした。

家に帰ると、庭の秋明菊のつぼみがふくらんでいることに
気づいた。
「あれっ、秋明菊のつぼみがふくらんでる！」
秋子は急にうれしくなった。
秋明菊の白い可憐な花が、秋子は大好きだったから。
こんなに暑くても、ちょっとずつ秋は近づいているんだなぁ・・・。
秋子は、玄関でお母さんに、
「お母さん、庭の秋明菊のつぼみ、みた？」
と聞いた。
お母さんは、
「えっ、もう、つぼみができてるの？」
と、エプロンで手をふきながら、あわてて出てきた。
「まぁ、ほんと。ここのところ忙しくて、庭をゆっくりみることがなかったから、
気がつかなかったわ。」
と言って、つぼみをのぞきこんでいる。
秋子もいっしょになって、秋明菊をながめていた。

と、そのとき、秋明菊のそばを羽根のついた小さな小さな女の子
みたいなものがとんでいるのをみた。
なんだろう？
これが、妖精なのかなぁ。

「お母さん、この小さな女の子、何だと思う？」
と秋子は聞いた。
お母さんは、
「何？なんにもみえないわよ。」
と言って、
「そんな妖精みたいなものが、本当にいるわけないじゃない。」
と笑いだしてしまった。

でも、秋子には、たしかにみえるのだ。
そして、その女の子がもっているステッキで、ひょいっと
秋明菊のつぼみをたたくと、秋明菊の花が、ぱっとひらいた。

秋子には、みえたのだ。
秋の妖精が、秋を届けてくれる瞬間が。